

イスラエル博物館所蔵「印象派・光の系譜展」

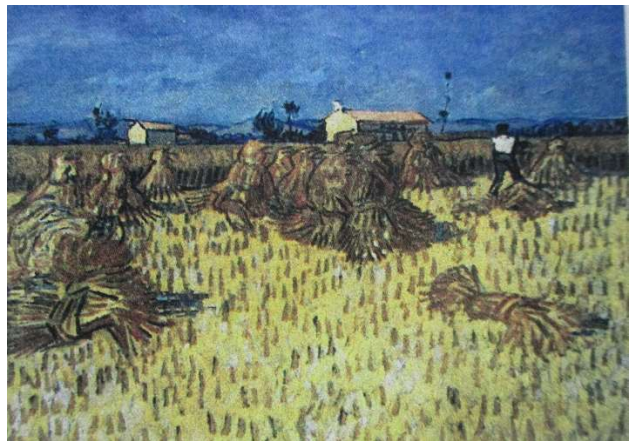
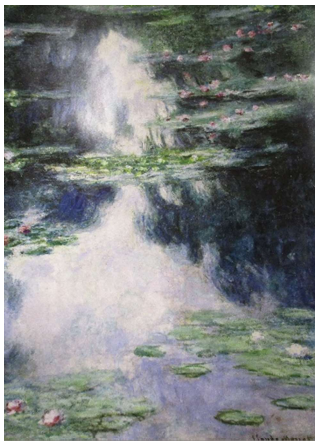
—モネ、ルノアール、ゴッホ、ゴーガン—

三菱一号館 21. 10. 15～22. 01. 16 あべのハルカス美術館 22. 01. 28～04. 03

「イスラエル美術館」は、古代から現代まで「約 50 万点」にのぼる文化財や美術品を所蔵することで知られ、印象派の作品も珠玉の収集品を誇る。

本展はその貴重なコレクションの中から、印象派の先駆けとして戸外で自然と向き合った「コロー、クールベ、ブータン」、そして王道の「モネ、ルノアール、シスレー、ピサロ」、この流れをより発展させたポスト印象派の「セザンヌ、ゴッホ、ゴーガン」、さらには印象派の表現を独自の親密な世界に移し変えたナビ派の「ボナール、ヴューヤール」など「約 70 点」を厳選して「印象派の光の系譜をたどる」という少々贅沢な企画である。

特筆すべきは、従来、印象派の作品は何回も展覧会が開催されてきたが、日本でまとまって公開されることのない作品群が一堂に会することであろう。



クロード・モネ 《睡蓮の池》 1907年 左

画伯がジュネーブに住んでいた頃、自宅の庭にある睡蓮を「約 200 点」も描いているのは、同じ題材であっても一日の内に、光の加減で見え方や写り方が異なってくるためであるとされている。本作品は当り年とされる年（1907 年）に描かれた「睡蓮」で、本邦初の公開とされるためにかなり注目されている。

フィンセント・ファン・ゴッホ 《プロヴァンスの収穫期》 1888年 右

画伯は、小麦の収穫の時期に「収穫と農家を主題とする連作」を描いているが、本作は主にオレンジとブルーのコントラストで構成され、色彩の組み合わせによって、初夏の雰囲気やプロヴァンスの空の青さのもとに広がる黄金の麦畑の状況を描き、生命の営みや自然のサイクルや永遠性を見出したとされる。